筒井新聞　第 354 号（1）

福島の今

3 月末に、福島県へ行って、原発事故後 8 年の間に生じた様々な動きの現状を見学してきた。その要点をご報告したい。

3 月 28 日（木）

朝 8 時半に登戸駅で、戸田みどりさん、佐藤和宏さん、筒井哲郎・律子の 4 人が落ち合って、車で常磐道をめざした。途中で和田央子さんが合流し、車中は満員になった。戸田みどりさんは放射線被ばくで病んだ〈希望の牧場・ふくしま〉の牛たちの絵を描いている日本画家。和田央子さんは福島県の地元で廃棄物処理の不条理を食い止めようとしている人たちの中での中心的な存在。

戸田さんは、見るからに繊細な優しい方で、そのような生と死の境をさまよう牛たちと正面から向き合う強さを秘めておられることが、私たちには不思議であった。車中の四方山話は、その疑問を浮上させた。それに対する戸田さんの答えは、ご自身の半生を語られた貴重なものになったので、別稿〔本号（2）〕として掲載する。

14：15 頃に三春町の**福島県環境創造センター**（この施設の一部が〈**コミュタン福島**〉という交流棟になっている）に到着。研究所の見学には、あらかじめの申し込みが必要であるが、それは和田さんがすべて手際よく手続きしてくださっていて、担当の職員の方が迎えて下さり、初めに概要を説明する方があり、その後二つの研究棟をそれぞれのテーマごとに研究者の方々が説明下さった。〈環境創造〉とは、放射能で汚された地域の環境を居住可能な環境に戻すという意味で、現在の福島県内の放射能汚染の状態のモニタリング、動植物がどう変化してきたかなどの生態環境のウォッチ、除染や除染土壌の処分方法についての基礎的な研究が紹介された。その後〈コミュタン福島〉の方も案内していただいたが、この施設についての報告はすでに行っているので内容説明は割愛する[1]。ここへは、福島県内のすべての小学校 5 年生が、授業の一環として見学に来ることになっているそうだ。どうしても施設のネーミングが気になるが、「環境創造」というのは本来神の手にしかできない「天地創造」に似ている。人間ができることは、汚したところを掃除するくらいなのに（放射能の場合はそれもほんとうはできない）、と思ってしまう。

1 時間ほどで辞して、大越町の木質バイオマス発電の建設予定地を見に移動する。JR 磐越東線沿いの道を走って、大越駅に近づくと、「バイオマス発電　絶対反対」と朱書した幟旗が点々と目についた。地元の方と連絡を取り、その案内で山のふもとの〈**田村バイオ**

[1] 拙著『原発は終わった』緑風出版、2017 年、pp.236-233

マスエナジー〉の発電所建設予定地を見学する。

かつて、住友セメントが操業していた跡地を利用して、新たに株式会社タケエイ（本業は廃棄物処理・リサイクル事業）が木質バイオマス発電を建設する工事を本年 1 月に着工したところである。竣工は 2020 年夏頃としている[2]。この発電会社の株主は、株式会社タケエイ（80%）と田村市（20%）であり、資本金は 5 千万円である。発電能力は 7,100 kW、運転時間は 24 時間/日 x 330 日/年の連続運転である。敷地面積は 3 万 6 千平方m と言っているが、敷地造成や周辺の道路整備は予め田村市の方で手厚く準備したようである。燃料の木材を集積するエリアも含めて広大な敷地が準備されている。

図 1．田村バイオマスエナジー　建設工事サイト

このバイオマス発電所の何が問題かを説明したい。従来除染工事として環境省が作業を行ってきた範囲は、道路・宅地・田畑に限られてきた。そして、森林は手の付けようがないとして何もしないと言われてきた。したがって、福島県の面積の 71%（森林率）が除染対象外であった[3]。その結果、大部分の面積が放射能汚染のまま残される。そして、県内におよそ 1000 軒ある林業の人びとも仕事を失ったままである。森林を将来利用するためには間伐する必要がある。その間伐材を利用すればバイオマス発電に

[2] 「株式会社田村バイオマスエナジー　発電所建設工事開始のお知らせ」㈱タケエイ、2019 年 1 月 24 日

[3] 「都道府県別森林率・人工林率（平成 24 年 3 月 31 日現在）」林野庁
http://www.rinya.maff.go.jp/j/keikaku/genkyou/h24/1.html

好適である。けれども、放射能汚染のない間伐材（木質バイオマス）なら、燃焼して発電するのは許容できる。けれども放射能が付着した間伐材を燃焼しての発電は煙突から放射性物質が付着した微粒子をまき散らすということである。大越町は山間の盆地であり、かつて住友セメントが操業していた時には、朝夕の気温低下の時には逆転層が形成されて、粉じんや悪臭に悩まされてきた。住宅や学校が集中している町の中心から数百ｍしか離れていないところから放射能をまき散らされてはとうてい住めなくなる、というのが住民たちの憂慮である。

バグフィルタを付けて、重量比で 99.99%の粉じんを捕集するというが、放射性粉体の付着割合が多い 1μｍ以下の粉じんの捕集率はぐんと落ちる。住民の反対を受けて市会議員が動いたところ、同社はバグフィルタの下流により細かい粉塵を捕集する HEPA フィルタを追加すると言ってきた。その資料の提示を求めたところ、図 2 のような外形図を提示された。HEPA フィルタというのは High Efficiency Particulate Air Filter のことで、通常はクリーンルームを作る場合などに使用するきわめて目の細かいフィルタである。そういうものを燃焼炉の後につけたら、たとえバグフィルタの後でも、頻繁に目詰まりしてしまう。しかも、バグフィルタのように逆洗はできないから、一度目詰まりしたら、内部の HEPA フィルタ・エレメントを交換しなければならない。この発電設備は年中無休であるから、交換用にもう 1 基並列にフィルタを設置しなければ交換できない。どうもこの図は眉唾である。

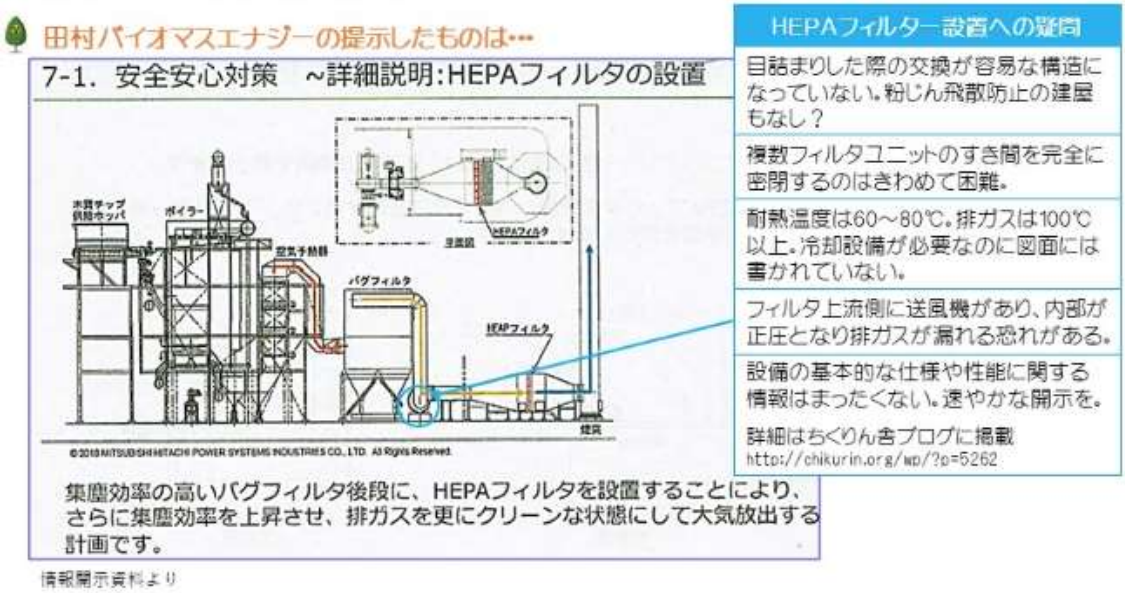

図２．田村バイオマスエナジーが提示した外形図[4]

[4] 「燃やしていいの？　放射能汚染木」大越町バイオマス発電に反対する市民の会
http://gomif.blog.fc2.com/blog-entry-600.html

これらの問題があるにもかかわらず、町の有力者たちは水面下で㈱タケエイと共同出資の契約まで交わしており、市民たちが知った時は、すでに既成事実が積みあがっていたという。3.11 原発事故の後、福島県の市町村は、政府がもたらす復興特別会計という公金の洪水にはまってしまい、平時にはない様々な動きに揺さぶられてきたのであろう。

現場を見たところで日が暮れて、その晩はいわき市駅前のホテルに泊まった。、

3 月 29 日（金）

朝 8：30 ホテルを出発。小 1 時間で富岡町の 6 号線沿いにあるこじんまりした**特定廃棄物埋立情報館〈リプルンふくしま〉**という聞きなれない施設へ行った。ここは昨年 8 月に開館したばかりである[5]。したがって、和田さん以外はまったく予備知識がなかった。入口を入ってすぐに教室のような部屋があり、そこにわれわれが座るべき机・イスと、説明用のパンフレットが準備してあった。

若い女性が「ここは、10 万 Bq/kg 以下の廃棄物を埋め立て処分するところです。種類としては、〈福島県内の指定廃棄物〉〈対策地域内廃棄物等〉〈双葉郡 8 町村の生活ごみ〉の 3 種類です」という。どうやら、ごみの種類で定義しているのではなく、発生場所で定義しているらしく、論理的ではない。聞き返すと、傍らの男性が「はい、わかりにくいのです。わたしも初めは分かりませんでした」という。

「ところで、〈リプルン〉という言葉は初めて聞きますが、それはどういう意味ですか？」と聞いたら、「リプルンというのは、Reproduce、つまり、再生という英語に愛称の〈ルン〉を付けたものです」「エーッ、なんとミーハーな命名！」と絶句してしまった。福島へ来るたびに初耳の言葉で、感覚がマヒしてしまうが、この日は朝 1 番から、魔界へ迷い込んだ感じ。

本題に入って、〈特定廃棄物埋立処分場〉の配置図と断面図を説明があったが、「地山に敷くプラスチックシートの寿命は 100 年です」とこともなげに言う。「えっ、プラスチックはもっと早く劣化しますよ」と言ったら、「地面の下では変わりません」と見事な大本営発表。

こんなお二人の話を聞いても仕方がないと、早々に別れを告げて車に戻り、その裏山に設けられている**〈特定廃棄物埋立処分場〉**へ向かった。案内所である〈リプルンふくしま〉を出ていったん 6 号線を南へ向かうとすぐに西側の田圃の中を山裾の方向へまっすぐに進む 1 車線の道が新設されていて、そこをダンプトラックが交互に走るように、途中およそ 100m置きに旗を持った案内人が、3 人立っている。そのうちの一人は比較的若い女性であった。向う端に埋立処分場の案内所があり広い駐車場がある。そこへ車を置き、管理棟へ入ると、見学をガイドしてくださる女性と管理者が迎えて下さり、

---

[5] リプルンふくしま「お知らせ」環境省、http://shiteihaiki.env.go.jp/tokuteihaiki_umetate_fukushima/reprun/news/

ヘルメットを貸してくださる。身支度をして一行は高さが 50mほどの坂道を歩いて登る。ダンプカーが埋立土壌を運び込む自動車道の脇に、狭い仮の歩道を設けてあるのだ。登りきると、ダンプカーの受入検査場があり、運び込んだ土壌が 10 万 Bq/kg 以下であるかなどを検査する測定所をくぐるようになっている。その先に、荷を下ろしたダンプカーが町中へ戻る際に、トラックのタイヤを水洗し、強い放射性粉じんが付着していないかを検査して、退場を許可している。その脇を抜けて小高い展望台に上ると埋立土壌を受け入れ始めた谷底を一望できる。

図３．展望台から見た〈特定廃棄物埋立処分場〉

谷あいに廃棄物を層状に積み上げていき、最後に覆土するという。底部は、地山の上に不織布 3 層と間に遮水シート 2 層重ねるとのことであった。ガイドの女性が「防水のためにベントナイトの層を敷きます」というが、説明図には「ベントナイトの層」がない。「それはこの絵でどれですか？」と聞いたら、結局分からなかった。仮にベントナイトが敷かれていても、その防水効果の信頼性は低い。福島第一の事故直後に汚染水をためるために、ベントナイトで防水層を構成した池を作ったが、それが漏水して放射能汚染水が漏れるからというので、1000 立方mのフランジ型タンクを林立させるように方向転換した経緯がある。埋立処分場の底部から流出する水は、浸出水調整槽で確認した上で放流するというが、大雨や地震で地盤に割れ目が入った時などは汚染水がすべて調整槽へ来るとは保証できないはずだ。

この処分場には、合計 65.4 万立方mの廃棄物を埋設する計画である。受け入れ基準が 10 万 Bq/kg であるといっても、総量としては大量の放射能が集積され、その周辺にはぽつぽつ民家がある。もし、放射能が可視化できれば、その山間から燦然と光が差し出るはずである。帰りは同じ歩道を降りたが、その坂道を降り切ったところにある地福院という

お寺の境内にある墓地を背景に、〈楢葉町一歩会〉という住民団体が「放射性廃棄物の最終処分場建設に異議を唱える」と題した大きな看板が建てられており、冒頭には、「放射能汚染により、双葉郡内には人の住めないところがたくさんあって、放射性廃棄物の最終処分場を作るところはいくらでもあるのに、人の住むところに最終処分場施設を受け入れるという。それなら言いたい『本当にそう思うならば自分の家の近くに作ればいい』と！」と書いてあった(図４および図５)。

図４．最終処分場建設に異議を唱える住民の看板

図５．埋立処分場と周辺の民家・寺院

なお、この施設は富岡町内にあるが、坂の登り口は楢葉町に位置しており、周辺には転々と民家があり、すぐ東側には常磐自動車道が通っている。

次に行ったのは、富岡町の**〈廃炉国際共同研究センター〉**である。原発事故後、研究センターと名乗る施設がたくさんできたが、ここで日本原子力研究開発機構（JAEA）の福島研究開発部門を確認しておこう[6]。

・福島事務所	福島市
・いわき事務所	いわき市
・楢葉遠隔技術開発センター	楢葉町
・廃炉国際共同研究センター	富岡町
・福島環境創造センター	三春町
・福島環境安全センター	南相馬市
・大熊分析・研究センター	大熊町

この施設の場所は、もともと富岡町文化交流センター「学びの森」という立派な建物があり、原発事故後その周辺に、この〈廃炉国際共同研究センター〉や大規模な病院を建てたりしている。ここでは、「国際」を名乗って、海外との交流拠点としているとの話であったが、建物が新しく立派な割に、具体的な研究内容は今ひとつピンとこなかった(2017年4月運用開始)。

ここで午前中の予定を終え、〈さくらモールとみおか店〉というショッピングセンターの食堂へ行った。この近隣では唯一の食事処で、駐車場には多くの労働者の車が止まって、店内も繁盛していた。

食事の後、**〈楢葉仮設焼却施設〉**へ行った。ここは2016年11月から稼働しており、200t/日の規模で除染廃棄物などを焼却している。発生した飛灰は、無人の工場内でセメント固化しているという。周囲を一周しただけであるが、ずいぶん大掛かりな施設であった[7]。

ついでに、6号線から海側に大きく見えていた**〈富岡町仮設焼却施設〉**の跡地を見に行ったが、すでに取り壊して、最後の基礎コンクリートを撤去しているところであった。ここは500t/日で、2015年4月焼却開始、2018年8月処理完了ということである[8]。こんな大規模で高価な施設を作っておいて、3年で用済みというのは正常な設備計画とは言えない。

---

[6] 福島県における日本原子力研究開発機構の活動拠点　https://fukushima.jaea.go.jp/access/

[7] 「楢葉町仮設焼却施設」
http://shiteihaiki.env.go.jp/initiatives_fukushima/waste_disposal/naraha/processing_naraha.html

[8] 「富岡町仮設焼却施設」
http://shiteihaiki.env.go.jp/initiatives_fukushima/waste_disposal/tomioka/processing_tomioka.html

ここで、和田さんとはお別れし、4 名（戸田・佐藤・筒井 2 名）は〈希望の牧場〉へ向かった。

〈希望の牧場〉は、6 号線を北上し、浪江町から山間へ向かい、さらに車 1 台の幅しかないわき道をそろりそろりと登って視界の開けた中腹にある。原発事故時に放射能のプルームが北西の方向へ流れて、浪江町―飯舘村―伊達市の汚染がひどかったが、ちょうどその線上にあって牛たちは放射能で汚染された牧草を食べ、多くが病気になっている。

牧場の中央は、すり鉢型の広い草地に牛たちが思い思いに草を食んだり寝そべったりしている。その周りを囲む高台の上に、牛舎や、牧場主・吉沢さんの住まいや、事務所などが点在している。

勝手知ったる戸田さんは、病牛の牛舎の中へ入っていき、牛たちに挨拶しておられる。われわれもその後についていった。牛舎の中の数十頭に挨拶してから、丘の向かい側におられる吉澤さんを訪ねた。彼はちょうど大きなパワーショベルを運転しながら、大量のレタスを牛たちに与えていた。近隣の農家の方々が、商品にならない野菜を差し入れてくださると話された。その作業場の一帯は舗装されていて、彼が街頭宣伝に出かけるときの牛のオブジェの載った車もあった。その広場の端に、駅の表示板の形をした標識があり、図 6 の文字で彼の主張が記されていた。

牛の数は最盛期には 360 頭いたと聞いていたが、次第に病に倒れて現在は 280 頭ほどだそうだ。

図 5．牛たちが点在する牧場

図６．〈希望の牧場〉の標識

外で挨拶を交わしたのち、その広場の一角にしつらえられた事務所へ入って、吉澤さんの思いをお聞きした。いちいちは書ききれないが、「日本の社会は取り返しのつかない誤りを犯した。それを反省して、政策を改めなければいけない、けれども、それを改めるどころか、依然として罪の上塗りをしている」というのが、彼の論点であった。やり場のない悲しみと憤りが、被ばくで病んでいる牛たちとともに生きる道を選ばせているようである。牛たちのみならず、ここで生活し続ける吉澤さん自身も日々被ばく量が蓄積しているはずだ。

彼の話を聞いていて、戦争直前の時代(1933 年)、日本の軍国主義政府が中国侵略を深めていくさ中での矢内原忠雄の「悲哀の人」という講演を想い出した。

> 若しも国民が間違いをしたならば私がその罪を負いましょう。わたしがそのために死にましょう。――之は誰にもできることです。それが悲哀の人です[9]。

有効な手立てがあるわけではない。この道を進むしかない…というのが吉澤さんの思いなのだろうと、考えながら 1 時間ほどで辞去した。

それから、また 6 号線を南に下り、戸田さんと富岡駅でお別れし、佐藤＋筒井 2 名が、楢葉町の**〈楢葉遠隔技術開発センター〉**へ行った。見学の約束の時間は 16 時から 17 時ま

[9] 『矢内原忠雄全集』岩波書店、1964 年、第 18 巻、 p.532

でであったが遅刻してしまった。しかし、最初に「終わりは 5 時でよいですね」と念を押された。おそらく金曜日の夕方なので、東京から単身赴任している人たちが、帰宅時間を待ちわびていたのであろう。

この研究所は、高さ 40m の大きな建物を擁し、事故炉の格納容器の 8 分の 1 模型を作って、ロボット開発などを行っているという、一連の JAEA の研究所の中では知られた老舗である。われわれが行ったときは、格納容器の模型はすでになく、代わりに格納容器底部の部分模型があり、ベント管 1 本とその上のドライウェルの部分とその下のサプレッションチャンバーの部分を構成していた。現在ドライウェル底部に冷却水を循環しているが、サプレッションチャンバーにも流れ、さらにそこから外へ漏れだしているので、ベント管内に水中で固まるセメントを流し込んで水封する実験をしたのだという。汚染水量を少なくするための対策を確認する実験であったようだ。そのほか、比較的こじんまりしたドローンの研究や、水中カメラの試験水槽などがあった。ドローンの実演のために開発の若い人たちが数名待機してくださっていたので恐縮した。

話を聞いていて感じるのは、大きな廃炉プロジェクトの全体像が描かれていなくて、当面できそうなことをコツコツやって、「最新技術の成果です」と言っているように見える。その場合は、出来ることをできるスケジュールでやるという形になり、スタッフの方々の間にそれほど緊張感があるようには見えなかった。

その晩は再びいわき駅前のホテルに泊まった。

3 月 30 日（土）

9：00　3 人で、いわき市から 6 号線を北上する。広野町役場の交差点を左へ入る。かつて廃炉セミナーに来た広野町体育館、その裏山にあるモダンな広野中学校、夜間照明付きのサッカー場などを見て、さらに周囲を巡ると新設の**〈ふたば未来学園〉**新校舎の前へ出る。広壮な新築の校舎・体育館・グランドができたばかりで、この 4 月から供用されるという。もともと 3 年前に全寮制の高校が広野駅の近くに開校し、この新校舎ではさらに中学生も募集することになっている。工事関係者が数人後片付けをしているだけで、閑散としていたが、その施設の豪華さには目を見張った。その豪壮な教室と二つの体育館を見ると、優に 1000 人を受け入れることができそうだが、当面わかる人数は、2018 年度の高校在校生が 422 人、新年度の中学生募集定員が 60 人だということである[10]。

[10] 福島県立ふたば未来学園高等学校生徒数 https://futabamiraigakuen-h.fcs.ed.jp/%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E7%B4%B9%E4%BB%8B/%E7%94%9F%E5%BE%92%E6%95%B0
ふたば未来学園中学校　最新情報 https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/edu/kaikakushitsu05.html

図７．ふたば未来学園の新築校舎

その周りをぐるりと回って再び 6 号線に出、北上して富岡町中央部の**〈東電廃炉資料館〉**へ行った。ここは元東電の〈エネルギー館〉という展示館であったが、震災後はさまざまな使い方がされ、原発事故サイトへ入る見学者の拠点として使っていたＪヴィレッジが返却された後は、ここが拠点となっており、2017 年に筆者が国会議員たちとサイトに入った時は、ここが集合ポイントであった。内装外装をきれいに改めて〈廃炉資料館〉として開館したのは、2018 年 11 月末のことであった。したがって、まだ 4 カ月しかたっていない。内部はまったく新しくきれいに作り変えられており、入り口近くにはゆったりした休憩室もあって、熱いお茶が供されている。

入口の受付には、若い男女の職員が各 1 名おられ、大勢を受け入れる体制ではあるが、土曜日の休日にもかかわらず、10 時過ぎに入った時には、客はわれわれ 3 人だけであった。わたしは受付の人に「廃炉の状況をインターネットで見ていると、水冷から空冷に切り替える意図をお持ちのように見受けられるが、果たしてそうかどうかを伺いたい」と申し入れた。困惑した表情ではあったが、「奥の方に聞いてみます」という返事であった。一通り展示を見たころに、管理職の年配の男性が現れていろいろ話ができた。

私「現在、デブリの発熱量は、1 号機で 80ｋW、2・3 号機で 90ｋW 程度である。1 週間水冷を止めても危険のない程度と考える（家庭のこたつだって 1 個 1ｋW の発熱量だから、自然対流による放熱だけでも急激に温度上昇することはないはず）。水循環による冷却を続けているといつまでも汚染冷却水の増加は止まらない。汚染水の海洋放出が社会

問題になっているが、それは、大型タンクによって 100 年以上貯蔵するという方法で解決し、これ以上汚染水が増加しない方策として早急に空冷化すべきだ。最近の東電のホームページに、冷却水を一時的に停止する実験を行うという計画が発表されているが、その意図が書いてない。空冷化を目指していると考えてよいか？」
説明者「確かに空冷をめざしている。おっしゃる通りである。しかし、いろいろ問題がありまして……」
私「その問題が何かを当事者に聞く目的で、今日このように来ました」
説明者「いや、わたしは素人でして……」
私「いま言ったことの詳細は、原子力市民委員会のホームページに『100 年以上隔離保管後の「後始末」』というレポートで公表していますので、ご参照ください」[11]
説明者「はい、読ませていただいて、社内に報告書を上げます」

ちょっと頼りない感じではあったが、丁寧な応対をしていただいた。

そこを出てから、除染廃棄物の**〈中間貯蔵施設〉**の案内所である**〈中間貯蔵工事情報センター〉**へ行った。

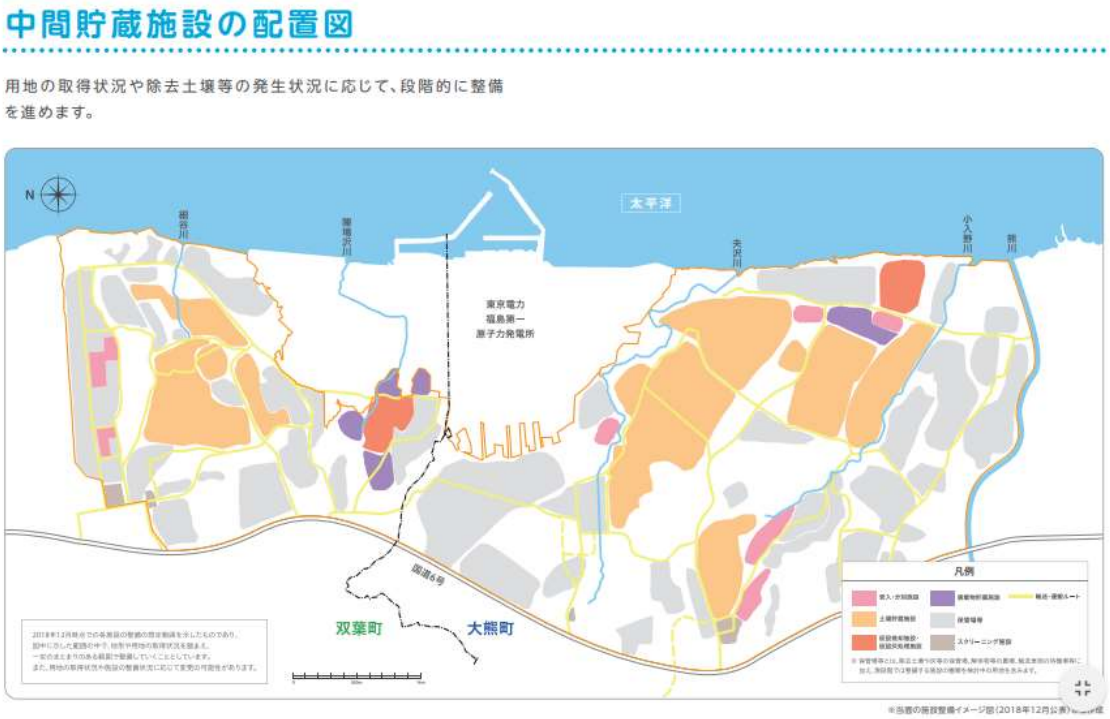

図 8.　中間貯蔵施設の配置図（案内所のパンフレットから）

[11] http://www.ccnejapan.com/?p=7900

双葉町と大熊町にまたがる 16 万平方ｍの敷地を確保して、公称 30 年間除染廃棄物を貯蔵するという巨大な施設である。この用地の規模は、福島第一原発の敷地面積が約 3.5 万平方ｍなので、その 4.6 倍という広大な面積である。

すでに、減容化のための 150t/日という大規模な焼却炉 2 基の建設が決まっており、それぞれに飛灰をセメント固化する無人工場が併設されるという豪華な施設も建設される。この敷地全体を管理するのは JESCO（Japan Environmental Storage & Safety Corporation）という会社で、この会社の主体は、PCB 処理を専門とする産廃処理業者であった。この情報センターで説明する人たちもそういう仕事をしてきた年配の職員たちであって、まだ新しい仕事に着手したばかりという雰囲気であった。

この中間貯蔵施設に集積した除染廃棄物は 30 年後に他県へ搬出すると地元の人々に約束している。そして、この広大な敷地は買い取ったわけではなく、地権者から借り上げているという契約である。しかし、どうやら政府の審議会の中では、除染廃棄物を市中へ環流させて、30 年後にはほとんど残らないようにすることを画策しているようである。具体的には、8000Bq/kg の除染土は無害であると定義を改めて、道路や堤防などの土木工事に「資材」として安く提供することを決定している。汚染土壌が一回りして再び生活圏へばらまかれる訳である。

福島原発事故の後始末の費用は、政府が公式に発表している費用が 22 兆円である。その内訳は、廃炉費用が 8 兆円、損害賠償が 8 兆円、除染が 6 兆円である。除染費用の内、今まで使った費用は約 3 兆円である。その業務内容は、被ばく地の生活空間の除染工事と、汚染土壌の減容化の 2 項目がほとんどを占め、しかも、減容化施設の方が町中で目立つ汚染工事より若干多い。つまり、やってほしくない工事ほど多くの予算が投入されている。

中間貯蔵施設や直接埋設施設に今後 3 兆円の予算が投入されるということは、もちろん望ましくない。仮にもう一息除染すれば居住可能という限界的な汚染地域を除染して帰還するというなら、それはあり得るかもしれないが、20mSv/y という基準で帰還を促し、それでも 1400 万～2200 万 t という大量の除染土を積み上げるというのは、不健全であり、費用のかけ方も不合理である。

この情報センターを終えてから、富岡町のさくらモールで遅い昼食を取り、富岡インターチェンジで常磐自動車道に乗って、一路帰京の途に就いた。この高速道路のいわき市から北の部分は 1 車線であるが、ちょうど今 2 車線に拡幅工事を行っている。早速路盤に 8000Bq/kg 以下の除染土壌が活用されるのではないかと思われた。

福島県内では現在様々な土木工事が行われているが、浜通りと中通りを結ぶ新しい道路工事も進行中であるし、南相馬市では〈ロボットテストフィールド〉という、新たな大規模研究施設が建設中である。除染事業に携わる環境省や土建工事会社らには好都合な計画が目白押しといわなければならない。

感想

今回の福島見学旅行で、6号線に沿っていわき市から浜通りを北上してまず感じたことは、一見事故の後遺症が無くなったかのような外観を呈していたことである。1年前に見た、汚染土壌を詰めたたくさんの黒いフレコンバッグが田畑から姿を消していた。富岡町の大規模な減容化仮設焼却炉が消えていた。そして、よく見ると、汚染土壌や廃棄物を自然の谷あいや大規模な中間貯蔵施設に搬入して、人々の目から消されつつあるけれども、それが決して解決にはなっていないという現実である。問題がかえって不可逆に潜行している実態を見て、より深い憂慮を禁じえなかった。

この日常世界からかけ離れた事柄をたくさん目にして、二日酔いのような気分に襲われた。もちろん、よそ者が言うまでもなく、地元の人々にとっては、こういう状態にした政府や事業者を許せない気持ちは決して消えないであろう。そして、放射線の影響が人の寿命の何世代にもわたって続くことを思えば、「見張りの者よ、今は夜の何時か」[12]と愁眉の開く日の展望を求める気持ちに揺れ動くことであろう。

ところで、この旅行中、頭の整理がつかないほどの研究施設や除染廃棄物処理施設を見学した。そこで働いている人たちが、いずれも慇懃かつ丁寧に説明してくださったが、すべての立派な建物や研究施設が税金で建てられ、運用されていることを思えば、どうしても不条理を指摘せざるを得ない。

第一に、どの研究所や廃棄物処理施設でも、作業者の勤労意欲が高くない、ということである。そもそも、これらの業務は、原発事故という負の遺産の〈敗戦処理〉業務であり、野球でいえば〈消化試合のリリーフ・ピッチャー〉をやらされているようなものである。だから、仕事に期限がない。傍目には、のんべんだらりと映る。

第二には、研究所の人びとを見て感じるのは、大きな統合的プロジェクト目標がないことである。現在できる範囲の単位操作技術（たとえば、ロボット開発やドローンによる測定）を、格納容器内や原子炉建屋内で応用するということに特化してマニアックな試験を繰り返しているようである。〈遠隔技術開発センター〉では管理職が案内してくださって、格納容器内の冷却などをテーマにした会話を交わしたが、「空冷化を目指しておられるのですか？」といったら、「それはわれわれが考えることではないので」という、完全に下請け意識であった。こういう研究所をバラバラにたくさん作っても、現場に密着した有効な研究成果は出てこないのではないか。

第三には、研究においても廃棄物処理においても、その仕事の来歴を問わずに、狭い範囲の言われたことだけをやる、という限定された立場に置かれていることである。つまり、組織設計が人びとを〈アイヒマン化〉[13]している。分断され、個々の人々が自らの仕事の

---

[12] イザヤ書、第21章11節

[13] アンナ・ハーレント、大久保和郎訳『エルサレムのアイヒマン』みすず書房、1969年

意味や責任を考えて悩まなくてもよいようにしていることである。このことは、原発の業務のそこそこに共通してみられる現象であり、気楽かもしれないが、積極的に仕事に貢献しようという士気が生まれてこない。お会いしたすべての人が、表向きの慇懃な態度によって波風が立たないように振舞っているが、力を出し惜しみしながら時間の消化を待っているだけという印象をぬぐえなかった。

（2019 年 4 月 4 日　　哲＋律）